

防災道の駅やちよ 整備コンセプト



令和4年3月
防災道の駅やちよ整備検討会

目次

1	道の駅について	2
	(1) 「道の駅」の概要.....	2
	(2) 「防災道の駅」について.....	4
2	道の駅「やちよ」について	6
	(1) 道の駅「やちよ」の現状整理.....	6
	(2) 道の駅「やちよ」の防災上の位置づけ	9
3	防災道の駅やちよの整備コンセプト	11
	(1) 現在の道の駅「やちよ」のコンセプト	11
	(2) 整備コンセプト策定にあたっての考え方	12
	(3) 防災道の駅やちよの整備コンセプト	13
4	整備コンセプトを実現させるための方策	20
	(1) 防災施設整備の考え方	20
	(2) 「道の駅」の施設配置特性を活かした機能の検討.....	21
	(3) 「道の駅」の認知度向上.....	23

はじめに

八千代市は、首都 30 キロ圏の位置と交通の便、自然環境の良さから昭和 32 年に完成した日本の大規模団地の発祥である八千代台団地をはじめとした大規模団地の建設が進み、首都圏のベッドタウンとして急激に発展してきました。

平成 9 年 3 月には、千葉県で 3 番目の「道の駅」として、道の駅「やちよ」（以下、「やちよ」という。）が、市の中央を流れ、八千代市のシンボルである新川沿いに開業しました。

「やちよ」は、高い物流機能を持つ国道 16 号に隣接し、県庁所在地である千葉市等の湾岸人口密集地域や船橋市や柏市等の中核市と良好なアクセス性があります。加えて、豊かな自然環境に囲まれた緑の景観を有しています。

これらの地の利を生かし、全国の先駆けとなる農産物直売所や酪農家の手作りアイスのほか、いちご狩り体験や体験農場による収穫体験や各種イベント等を通じた、まちと農家との交流機能として、道路利用者はもとより、市民にも愛され、利用されてきました。

こうした中、令和 3 年 6 月に国土交通省の「道の駅」第 3 ステージの取組である「防災道の駅」に「やちよ」が選定されたことを受け、学識経験者と行政そして民間有識者からなる整備検討会を設置し、単なる防災施設の強化整備のみでなく、平常時の「やちよ」の更なる賑わいを創出し、平常時と災害時ともに拠点として機能できることが重要と考え、必要な整備コンセプト等を検討し、策定しました。

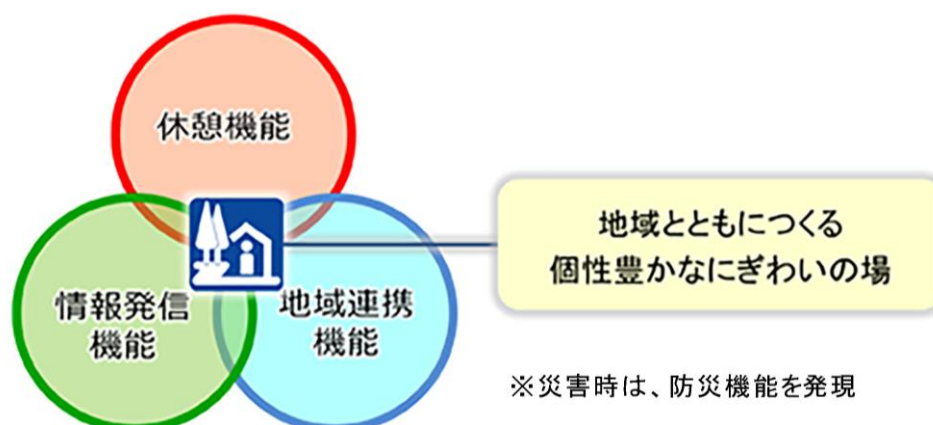
なお、本整備コンセプトは、「防災道の駅」の整備計画や「やちよ」のより一層の賑わい創出や活性化を目指す上での基本的な考え方であり、今後、市の上位計画等へ寄与することを目的とします。

1 道の駅について

(1) 「道の駅」の概要

「道の駅」とは、「道路利用者のための「休憩機能」、道路利用者や地域の方々のための「情報発信機能」、「道の駅」をきっかけにまちとまちとが手を結び活力ある地域づくりを共に行うための「地域の連携機能」、の3つの機能を併せ持つ休憩施設です。

「道の駅」は、道路利用者への安全で快適な道路交通環境の提供や、地域の振興や安全の確保に寄与することを目的とし、休憩機能・情報発信機能・地域連携機能を基本コンセプトとしています。



出典：国土交通省 HP

○基本コンセプト

休憩施設

24 時間、無料で利用できる駐車場・トイレ

情報発信機能

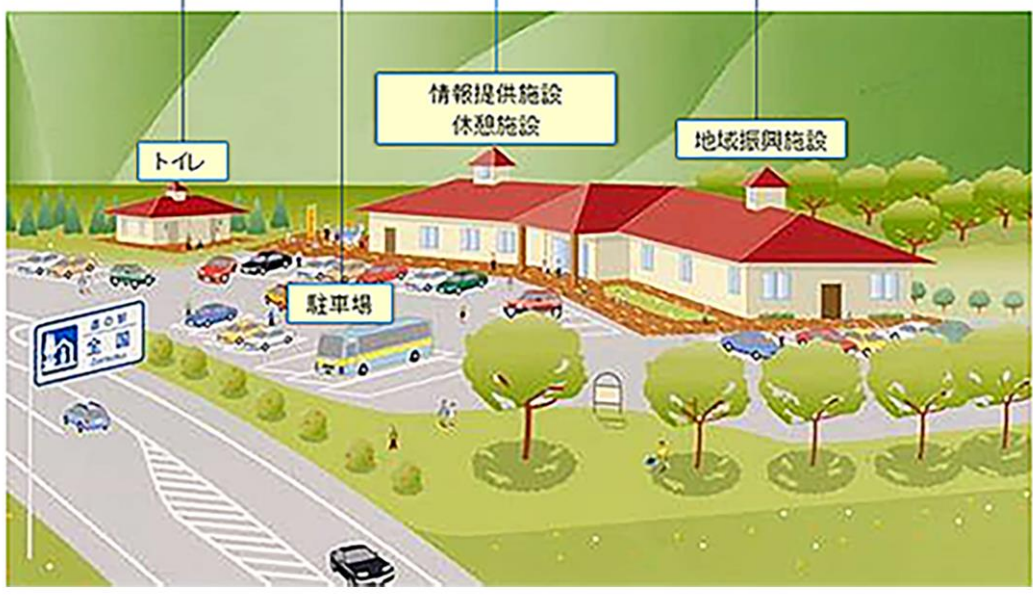
道路情報、地域の観光情報、緊急医療情報等

地域連携機能

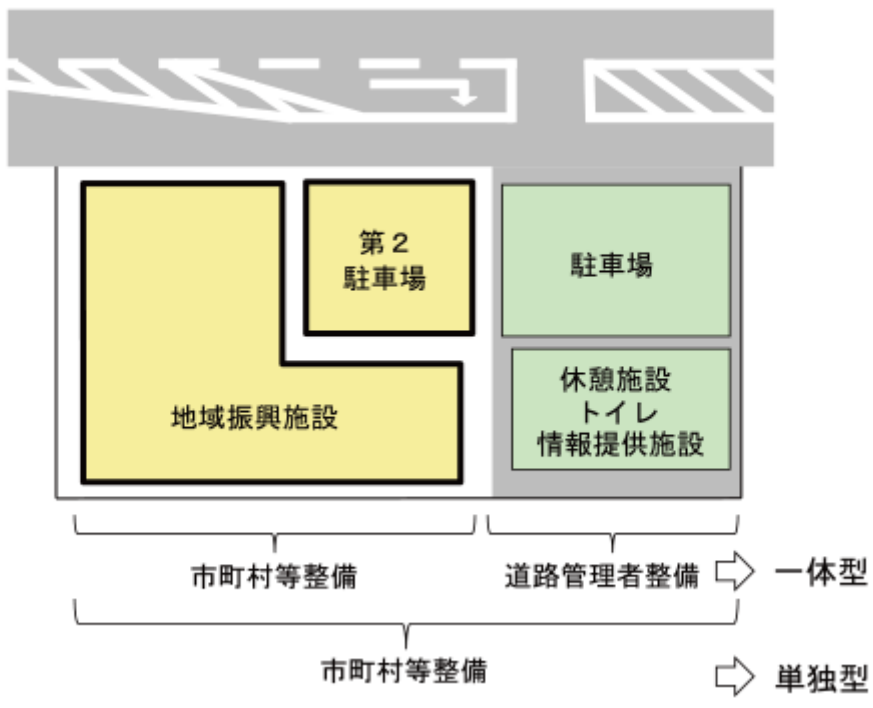
文化教養施設、観光リクリエーション施設等の振興施設や
防災施設（感染症対策を含む）

駐車場、トイレ、情報提供施設、休憩施設
※道路管理者又は市町村等で整備

地域振興施設
(文化教養施設、観光レクリエーション施設など)
※市町村等が整備



整備主体と整備内容



出典：国土交通省 HP

(2) 「防災道の駅」について

「道の駅」は平成5年の制度創設以来、四半世紀が経過し、令和3年6月11日までに全国で1,193駅が登録されています。

全国展開とともに「道の駅」の役割も進化しており、制度創設当初の第1ステージでは「通過する道路利用者のサービス提供の場」とされ、平成25年からの第2ステージでは「道の駅自体が目的地」となり、年間利用客は2億人以上、年間売上高は約2,500億円にも達し、新潟県中越地震、東日本大震災等大規模災害時には防災拠点としての役割を發揮してきました。

一方で、昨今取り巻く状況から、訪日外国人観光客への対応や頻発化・激甚化する災害への対応、少子高齢化社会への対応が「道の駅」の今後の主な課題とされているところであり、国土交通省では、令和2年(2020年)から令和7年(2025年)までの間を、「道の駅」を「地方創生・観光を加速する拠点」とする第3ステージとし、目指す姿の一つとして、新「防災道の駅」が全国の安心拠点となることを掲げています。

「防災道の駅」は、都道府県の地域防災計画等で広域的な防災拠点に位置づけられている道の駅を「防災道の駅」として選定し、防災拠点としての役割を果たすため、ハード・ソフト両面からの重点的な支援を行うこととしています。

令和3年6月に、都道府県からの提案を踏まえ、重点支援対象となる「防災道の駅」として国土交通省が39駅を初めて選定しました。

「やちよ」は千葉県で唯一「防災道の駅」に選定されています。

2 道の駅「やちよ」について

(1) 道の駅「やちよ」の現状整理

「やちよ」は、国道 16 号に隣接し、千葉県では 3 番目に誕生した「道の駅」であり、平成 9 年 7 月に地域振興施設である「八千代ふるさとステーション」が供用しました。その後、平成 25 年に新川を挟んだ対岸に、「やちよ農業交流センター」がオープンし、二つの施設を併せて「道の駅やちよ」となりました。



- 設置者：八千代市
- 路線名：一般国道 16 号
- 整備形式：一体型
- 登録：平成 8 年 4 月（第 10 回）
- 供用：平成 9 年 7 月



「八千代ふるさとステーション」（以下、「ふるさとステーション」という。）は、全国の先駆けとなった農産物直売所のほか、市内の酪農家による搾りたての牛乳で作るアイスクリームの販売や千葉特産品を用いたレストラン等、「道の駅」としての認知度が高く市民や道路利用者に幅広く利用されている施設です。

一方で供用から 20 年以上経過しており、先道の駅ゆえの手狭感や大型車駐車場やトイレの基数不足、情報提供施設等施設の老朽化が課題となっています。

「やちよ農業交流センター」（以下、「農業交流センター」という。）は、料理実習室と、サークル活動等で活用される研修室を備えるほか、各種イベントやバーベキュー、子供たちが遊ぶオープンスペースとなる芝生広場を有しており、どちらかという体験や経験の目的を持った人に利用されており、ふるさとステーションに比べて認知度が低い施設といえます。

特に、農業交流センターは国道 16 号から直接出入りができないことが課題となっており、アクセス機能の強化が求められているところです。

八千代ふるさとステーション



どちらかというと認知度が **高い**
市民に「道の駅」として利用されている

情報提供施設



利用者動線上にある情報提供施設（屋外）

- 道路情報、気象情報の提供
- 駐車場からトイレの動線上で屋外へ向けて設置され、利用者へ配慮されている
- ※ 災害対応の際も避難者の情報提供手段を確保

農産物直売所



- 他の道の駅のような、棚形式の他に、コンテナを並べた販売
- 有事の際、コンテナを排せば広い空間の確保が可能

※ 建物は耐震基準を満たしており、災害対応の際は避難場所等としての活用も可能

アピールポイント

- 市内酪農家による搾りたての牛乳で作るアイスクリームを販売
- 千葉特産のホンピノスを用いた麺類が看板メニュー



出典：道の駅「やちよ」HP



やちよ農業交流センター



どちらかというと認知度が **低い**
「ぶらっと立ち寄り」より、目的を持った人に利用されている

芝生広場

- 芝生広場ではバーベキューが可能
- 遊具等の貸し出しあり



BBQ風景

※ 災害対応の際はオープンスペースとして活用
『広域支援の拠点』『避難者の非常トイレ』等の活用が考えられる

料理実習室・研修室



調理実習風景



調理実習室



研修室

- 日頃は料理を通じ楽しみながら農業を知る場や、農業者向けの農産物の加工講習の場を提供
- サークル活動や説明会等で研修室も活用されている

※ 建物は耐震基準を満たしており、災害対応の際は避難場所等としての活用も可能

アピールポイント

- レンタサイクルで新川沿いのサイクリングが楽しめる
- 地域グルメが提供されているレストラン



出典：道の駅「やちよ」HP

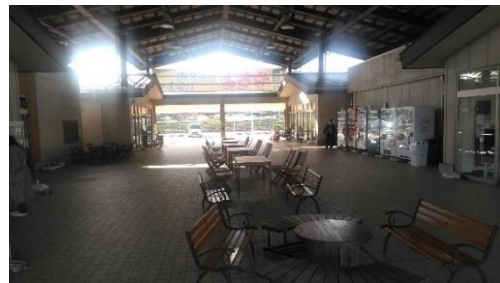


出典：道の駅「やちよ」HP

※ レストランでは、国交省の補助事業を活用し、地域活性化に取り組んでいる



大型車駐り場（10台）



平日の農業交流センター

(2) 道の駅「やちよ」の防災上の位置づけ

「やちよ」は、千葉県大規模災害時応援受援計画において、警察が応援活動を行う際の拠点とされているほか、千葉県広域道路交通計画において、災害時の重要な拠点としてソフト（災害情報の収集・発信等）・ハード（防災施設の整備等）の両面から防災機能の強化が必要な道の駅として位置づけられています。

また、千葉県北西部直下地震発生時、当該地は最大震度6弱の地震が予測されており、揺れやすさは「非常に揺れやすい～揺れやすい」、そして液状化の危険度は「低い」と予測されています。

ふるさとステーションは、洪水浸水想定区域の該当がほとんどないものの、農業交流センターでは、利根川洪水浸水想定区域（想定最大規模）において0.5m以上3m未満に該当しています。

	地域防災計画の災害想定 市の防災関連施設・県指定広域防災拠点	道の駅やちよ及び近傍施設	道の駅やちよ周辺ハザードマップ
地震の想定	(1) 震源地：千葉県北西部直下 ・震源の深さ：50km マグニチュード：7.3 ・予想震度：6強（市西側）、6弱（市東側） (2) 被害概要 ・人的被害：死者120人、重傷者230人、軽症者950人 ・避難者数：24時間で16,500人～約47,000人まで増加	(1) 想定最大震度 震度6弱 (2) ハザードマップ 揺れやすさ：「非常に揺れやすい～揺れやすい」 液状化危険度：「低い」	
風水害	(1) 水害 ・時間雨量35mm以上又は1時間雨量20mm以上かつ連続雨量150mm以上の場合、水害発生確率高 (2) 浸水想定 ・利根川下流の氾濫 新川では曹田、桑納川では桑橋付近の河川沿い低地が浸水（利根川下流氾濫から約18時間後） ・印旛沼等 新川の北側低地、新川沿いの城橋北及び神崎川沿い低地等が浸水 (3) 土砂災害 ・谷底平野と台地の境界の崖（段丘崖）で多く発生 ・市内の土砂災害警戒区域×63（内数として土砂災害特別警戒区域×54）	(1) 道の駅やちよ浸水想定 ・農業交流センターで0.5m～3.0m未満（継続時間 12時間未満） ※浸水想定は利根川最大想定時（72時間で491mm以上）のみで、利根川計画規模、高崎川（印旛沼など）では該当なし。 (2) 道の駅やちよ付近の土砂災害警戒区域等 ・土砂災害（特別）警戒区域 ・桑納、島田地区の新川沿い低地部と台地との境界付近に、7箇所	
避難所	八千代市内の小中学校や公民館を主体に45箇所	小学校（米本、米本南、陸）、阿蘇公民館の4箇所	
防災関連施設	(1) 第1次救護所（災害医療地区病院） 応急医療救護活動を行うため市医師会及び関係医療機関の協力を得て設置 7箇所を指定 (2) 市物産集積所 市民体育館、市民会館、市民ギャラリーに設置 (3) 緊急着陸場 総合運動公園、阿蘇中学校に開設	(1) 第1次救護所（災害医療地区病院） 新八千代病院（約1.2km）、島田台病院（約1.7km） (2) 市物産集積所（県立八千代広域公園一帯） 市民体育館（約5km）、市民会館（約5km）、市民ギャラリー（中央図書館）（約5km） (3) 緊急着陸場 総合運動公園（約5km）、阿蘇中学校（約2.3km） ※●km：道の駅やちよからの概ねの距離	
広域防災拠点 （県指定）	広域防災拠点 ・救援部隊となる災害時派遣機関が実施する応急活動の展開拠点、あるいは救援物資の中継拠点等の災害救援機能を果たすために県が指定 ・支援ゾーンとして県内を7区分（東葛・葛南ゾーン、千葉中央ゾーン、市原・木更津ゾーン、長正・夷隅ゾーン、海館・山武ゾーン、館山・鴨川・勝浦ゾーン、成田・印西ゾーン）	(1) 救援部隊 （自衛隊） ・陸上自衛隊習志野駐屯地及び演習場（約9km） ・海上自衛隊下総航空基地（約13km） （消防、物資集積拠点、ボランティア） ・県総合スポーツ公園（14km） （警察） ・道の駅やちよ（R3・7.30 千葉県指定） (2) 医療 ・東京女子医大付属八千代医療センター（約5km） ・船橋市立医療センター（約13km） ・海上自衛隊下総航空基地（航空輸送拠点）（約13km） ※●km：道の駅やちよからの概ねの距離	

3 防災道の駅やちよの整備コンセプト

(1) 現在の道の駅「やちよ」のコンセプト

「やちよ」は、単なる集客のみではなく、八千代市のランドマークとして、人との交流や地域の魅力発信等を通じた八千代市の誇りに繋げるべくワークショップを重ね、コンセプトを令和元年度に策定しています。

現在のコンセプト
(R元年度策定)

都心に一番近い、体験型 道の駅

<コンセプト策定の背景>

- ・道の駅「やちよ」は千葉県内における「道の駅」の先駆的存在、農産物直売のはしり
- ・単なる集客ではなく、八千代市の誇りに繋がる取組が必要

<主な目的>

- ・近隣の農業生産者・産業と連携し、経済の循環を目指す
- ・住民たちの過ごしやすい環境の整備とコミュニティの運営サポート（趣味、仕事、社会との関わり）を目指す
- ・経済的自立と集客力をつけ、近隣拠点と連携した広域活性化の拠点を目指す

<具体的な取組方針>

【収益】

- ・直売所の強化
- ・地域を体験できるイベントの開催
- ・研修室や調理室の活用 等



農業体験

【施設・環境】

- ・近隣生鮮食材の(集約)物流拠点化
- ・子供が楽しめる空間づくり
- ・イングリッシュ・ローズ・ガーデンの充実・促進等



料理教室

【ソフトの強化】

- ・情報発信の強化
- ・イベント予約のオンライン化
- ・ファンづくり（農業ボランティアの充実）等



農業ボランティア

(2) 整備コンセプト策定にあたっての考え方

「やちよ」が「防災道の駅」として機能するには、必要となる防災施設の整備と、災害時において「やちよ」がとるべき行動を形にした業務継続計画（BCP）の策定といった防災面の対策を整えておく必要があります。

また、市民や道の駅利用者に「やちよ」は安心拠点であることを認知いただくためには、来訪時に防災機能に触れる機会を設けるほか、平常時にも災害時にも利活用できる施設とすることが重要です。

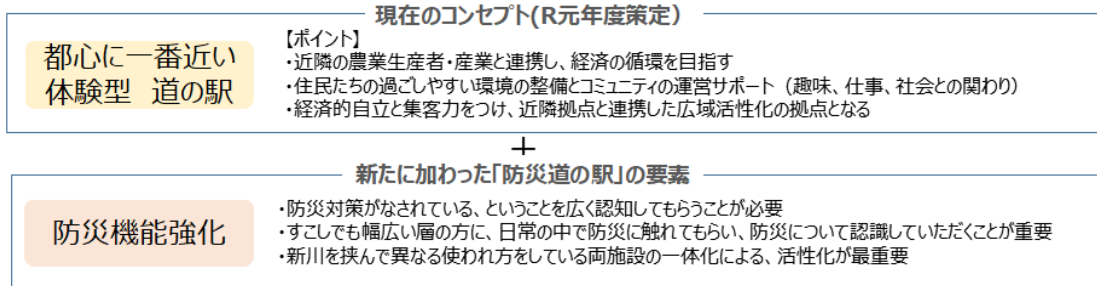
そのためには、防災施設を整えるのみではなく、平常時に新川を挟んで異なる使われ方をしている「ふるさとステーション」と「農業交流センター」を一体化することにより、これまで以上の活性化を図り、賑わいを創出することが肝要となります。



これらのことより、「やちよ」を防災道の駅とするにあたり、「何を目指すか」という目標を明確にするため、整備コンセプトを策定することとしました。

(3) 防災道の駅やちよの整備コンセプト

防災道の駅の整備コンセプトは、これまでの「やちよ」のコンセプトを踏襲しつつ、「防災機能強化」という新たな要素の反映も加えて検討を行いました。



新たに加える防災機能強化に必要な要素として、「やちよ」は『防災対策がなされている。』という認知の獲得、日常の中で防災に触れてもらうことによる防災認識の向上、そして、これらを達成するための「やちよ」の活性化（賑わい創出）が重要と考え、検討を行いました。

平常時においては、『「やちよ」には良いモノがある。』『行きたくなる。』と思わせるような施設等の整備・検討や、「やちよ」と新川等の観光資源との連携による賑わい創出や新川を挟んだ両施設の一体による活性化が重要となります。

災害時においては、防災機能へ円滑に転換し、広域的な防災拠点としての役割のほかに、「やちよ」利用者や道路利用者が『災害時には「やちよ」に避難していれば安心。』と思っただけのような、地域の防災拠点としての役割、それぞれが重要となります。

平常時の活性化と災害時の防災機能強化を図るための重要な要素として以下の3つがあげられます。

まず、「やちよ」でこれまでも農産物直売や酪農加工品の提供、体験農場等の取組を通じて好評を博され、市の重要な産業の一つである“農”。

次に、新川の遊歩道や桜並木等の市のシンボルであり憩いの場である観光資源や、道の駅での買い物やグルメ、学びの場等の“遊び”。

最後に、災害時には広域的な防災拠点としても道路利用者・「やちよ」利用者の安心拠点として機能する“防災”。

“農”、“遊び”、“防災”の3つの要素を兼ね備え、『行ってみよう!』と思う「防災道の駅やちよ」を目指します。

なお、持続可能な開発目標（SDGs）の取組に貢献することも重要と捉え、検討においてはSDGsの考え方を踏襲します。

整備コンセプト

行ってみよう道の駅 ～農と遊びと防災と～

- ・「行ってみよう！」と思う、道の駅を目指す
- ・国道16号と新川が交差する地の利と、川を挟んで立地する道の駅「やちよ」の特性を活かす
- ・平常時の活性化／災害時防災機能強化を両輪で進める
- ・持続可能な開発目標（SDGs）への取り組み

農

- ・農業振興や地元農家と市民等の相互交流の場
- ・農業体験や料理教室による家族の思い出作り
- ・心と体を支える食の大切さ、地元農畜産物の豊かさ、それを生み出す農業の価値を発信



農業体験



料理教室

遊び

- ・契約農家による高品質な農産物直売所
- ・様々な街のシェフの料理が楽しめるレストラン
- ・芝生広場や遊歩道(サイクリングロード)等のフィールド
- ・日本最長級の河津桜並木を有する新川
- ・学びの場（防災や上総掘り等）



農産物直販所

出典:道の駅「やちよ」HP



新川千本桜

出典:千葉県公式観光物産サイト-まるごとeiちよ-

防災

- ・道路利用者、日常的に利用する買い物客や農業体験等のリピーター客の安心拠点
- ・災害時における復旧活動部隊の広域的な防災拠点
- ・自家用車によりペット同行で避難
- ・周辺被災情報をリアルタイムで情報提供



広域防災拠点(イメージ)

出典:災害時における警察活動(警視庁)



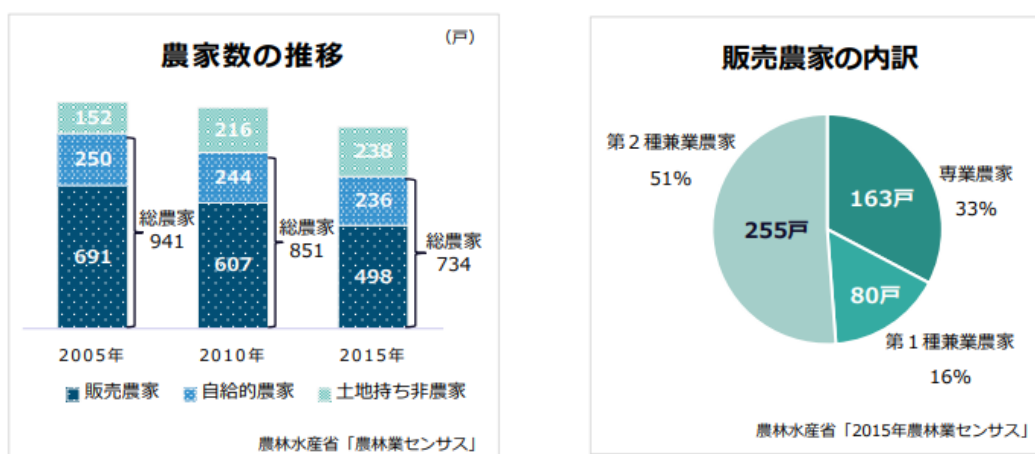
統合災害情報システム

出典:国土交通省

(農)

現在「やちよ」では、農業振興に資するため、市民等の農業に関する理解と関心を深めるとともに、農業者の経営意欲の増進並びに知識及び技術の向上を図ることに努めています。具体的には、稲作や畑作業を体験できる「農業体験」や苺狩りや芋掘り等の「収穫体験」のほか、農産物加工の教室、講習会、研修や様々なイベント等を開催し、農業に触れる機会を作るとともに、市民と農家の交流を図るため、毎年、農業ボランティア養成講座を開催しているところです。

整備コンセプトにおける「農」の観点からは、現在取り組んでいる農業に関する各種体験や経験の更なる推進と楽しさの周知。また、八千代市の生産物は新鮮でおいしいという強みの周知。更には生物の多様性など地域の環境に貢献する市の農業のPRにより、引き続き、八千代市農業の価値の発信に努め、市民等の農業に関する理解と関心を深め、農業に触れることを目的として「やちよ」に来る市民を増やすことが重要と考えています。



【参考データ】八千代市の農業

出典：八千代市第2次農業振興計画（令和3年3月／八千代市）

(遊び)

現在「やちよ」の農産物直売所クラフトは、契約農家が質の高い農産物を出品しており、花卉やお土産・雑貨等を販売しています。

他にも「やちよ」では、市内の酪農家が集まってできたアイスクリーム工房による毎日生産される搾りたて牛乳で作るアイスや、地元の名物店こだわりのメニューによる食が堪能できるレストランによる食の提供、農業交流センターでは芝生広場が子供たちの遊びの場や、バーベキューを楽しむ場として親しまれています。



出典：道の駅「やちよ」HP

また、道の駅に面した、市のシンボルである新川は、散策・サイクリング等を楽しむ憩いの空間であるほかに、日本最長級の河津桜並木を有しています。

加えて、高低差が少なく、ロケーションの変化に富んだ環境を活かした、ニューリバーロードレースも開催されており、新川一帯が市内の観光拠点として楽しみ・遊びのスポットとなっています。



新川千本桜

出典：千葉県公式観光物産サイト
-まるごとe!ちば-



遊歩道・サイクリングロード

整備コンセプトにおける「遊び」（楽しみを与える活動）という観点からは、現在実施している質の高い農産物等の販売や子供たちの遊び場、食事の場等を、更に充実させるとともに、新川千本桜や遊歩道等の観光資源と「やちよ」の連携強化、防災や郷土等体験し学べる場の環境を整備する等により、「やちよ」に行けば「楽しい」という気持ちを醸成することが重要と考えています。

(防災)

現在「やちよ」は、防災機能の整備がほとんどなされていないことから、地域の防災拠点及び広域的な防災拠点として運用できるよう、防災強化に必要なハード・ソフトを整備し、道路利用者や「やちよ」利用者、周辺住民に安心拠点と認識していただくことが重要です。

また、災害発生時、「やちよ」に避難する道路利用者や「やちよ」利用者の大部分の方々は、長期的な避難ではなく、被害状況の確認ができた段階、又は道路状況が改善される等の安全が確認できた段階で本来の目的地や自宅等に移動するものと想定しています。

このため、災害時においても「道の駅」に訪れれば、道路状況等を把握できるような環境の構築が必要と考えています。



現況の情報提供施設



統合災害情報システム

出典：国土交通省

また、災害時は、ペットを連れて避難をしたいという方もおられるため、自家用車によりペット同行で「道の駅」の駐車場へ避難し、時折「道の駅」のオープンスペースや新川沿いでペットを散歩させるような、新たな形での避難の在り方への対応も考える必要があります。

更には、災害時における実効性ある体制を構築するため、防災訓練のほか、災害時における業務継続計画（BCP）の策定による災害対応体制の強化を行うとともに、直売所の農産物出品者と災害時の食料供給に係る災害協定を締結する等、平常時から災害への備えを整えておくことが重要です。

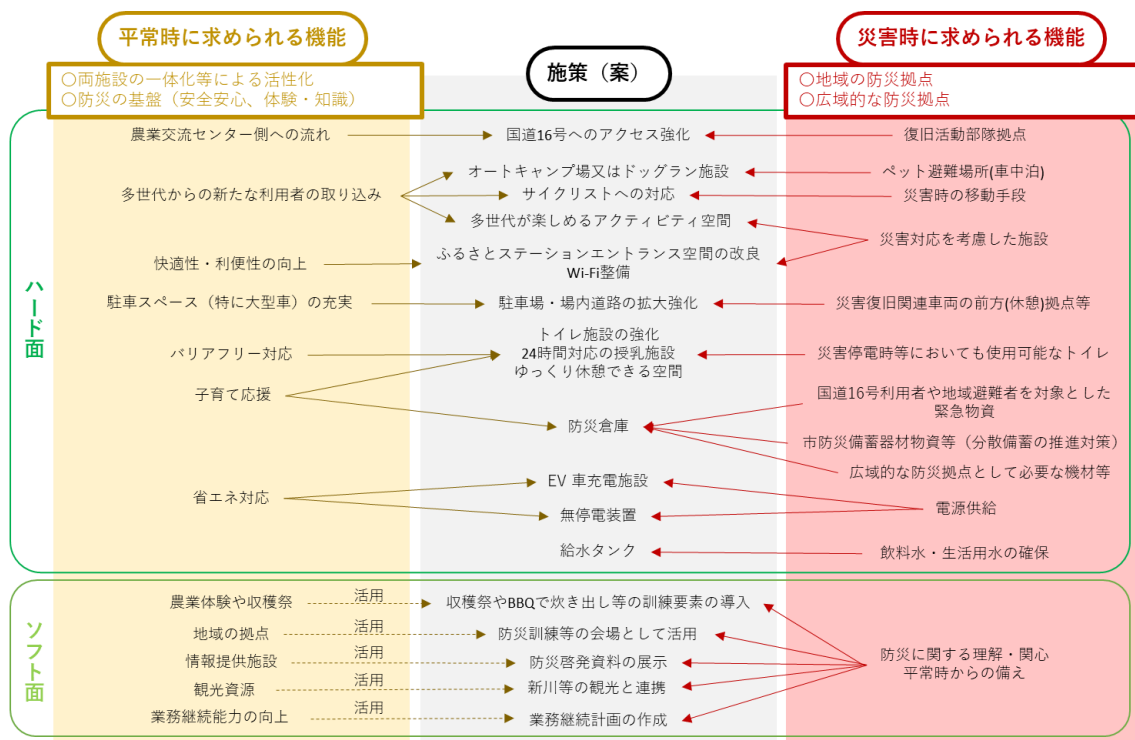
4 整備コンセプトを実現させるための方策

(1) 防災施設整備の考え方

「やちよ」の防災施設は、防災道の駅として求められる防災機能に対して、適切な規模で整備する必要があります。

また、防災施設が平常時の活用や体験メニューの拡充等にも対応できる施設となることで高い整備効果が期待できます。

そのため、ハード面とソフト面から平常時の振興と災害時の拠点の観点から求められる機能を抽出し、双方が求める機能が合致した取組を目指すべき施策として整理しました。

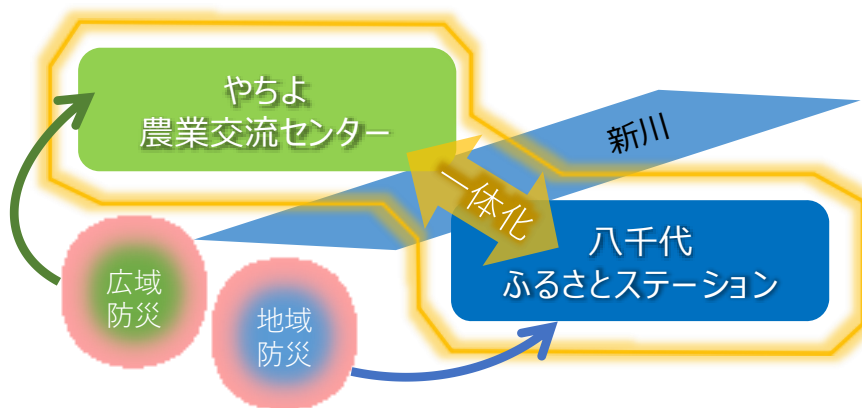


(2) 「道の駅」の施設配置特性を活かした機能の検討

災害時には、新川を挟んで立地するふるさとステーションと農業交流センターの役割分担を明確化し、効率的なオペレーションを図ることが重要です。

そのため、施設の配置特性を活かした役割分担と防災施設の配置の基本的な考えを以下に整理しました。

	ふるさとステーション	農業交流センター
災害時機能	国道16号等利用者および周辺住民	復旧活動部隊
災害時の位置付け	地域の防災拠点	広域的な防災拠点
整備内容	<p>主として道路利用者，周辺住民等の避難場所としての運用を想定</p> <p>(発災後3日間程度を想定。情報収集・一時避難場所として必要な無停電装置や防災トイレ、防災倉庫等)</p> 	<p>主として復旧活動部隊(警察)等の活動拠点としての運用を想定</p> <p>(復旧活動部隊の活動に必要な資器材は、復旧活動部隊の携行を前提)</p> <p>※イメージ</p>  <p>出典：国土交通省 出典：災害時における警察活動（警視庁）</p>



ふるさとステーションは、駐車場や地域振興施設等、「道の駅」としての機能が農業交流センターよりも比較的充実していることから、地域の防災拠点として位置づけました。

主に「やちよ」利用者や道路利用者、周辺住民等の避難場所として、発災後3日間程度、情報収集や一時避難場所として機能できる無停電装置や防災トイレ、防災倉庫棟の設備整備が必要となります。

農業交流センターは、駐車場に面して会議室や実習室が配置されており、応援・復旧の集結・活動拠点としての機能性に優れることから、広域的な防災拠点として、主に千葉県応援受援計画に基づく復旧活動部隊の拠点となる機能を想定しています。

なお、千葉県応援受援計画において、部隊の活動に必要な資機材は基本的に復旧活動部隊が携行することとされています。

(3) 「道の駅」の認知度向上

「やちよ」が災害時の備えを有し、道の駅利用者や道路利用者が災害に遭った際にも頼れる場所とするためには、『ここに避難すれば安心』という認知度の向上が重要と考えています。

このため、「やちよ」の更なる賑わいを創出し、その中で、防災についても認識していただき、少しでも多くの人に防災強化された「やちよ」を実感していただくことが必要と考えています。

これまでも「やちよ」で実施している農業体験や調理学習、各種イベントに加えて、新川沿いの桜並木や遊歩道等の観光資源とも連携し、サイクリングや舟運等による周遊や、農園や水辺のアクティビティの視点を取り入れることで、更なる賑わい創出が期待できると考えています。

また、日頃から防災意識を認識していただくための取組として、利用者の目につきやすいトイレや休憩所、情報提供施設等を活用し、既往の災害状況・対応や防災訓練等のパネル掲示による防災啓発や、人が集まりやすいイベント時に、防災関連ブースや体験プログラムを行うことで、「やちよ」利用者や道路利用者・周辺住民に対して安全安心と防災意識の向上を図ることが重要となります。



八千代地域生活支援センターでの防災訓練の様子
出典：特定非営利活動法人 日本防災士会



道の駅「やちよ」開設記念祭の様子（2018年7月）
出典：道の駅「やちよ」

「やちよ」の認知度向上も兼ねた賑わいを創出するには、ソフト面の取組も活用して、ふるさとステーションと農業交流センターの両施設が一体的に運用される必要があります。

例としては、イチゴ狩りや各種体験等の待ち時間を双方の施設で表示することや、サイクリストが双方の施設に立ち寄る仕掛けづくりのほか、双方の施設での同時イベント発信や周辺の地域活性化の取組との連携等があげられます。

これらの実施にあたっては、行政や「道の駅」の指定管理者のみでなく、八千代市の周辺地域も含めた面的な地域活性化に取り組む機関等の掘り起こしや、相互連携を密にすることが重要です。そのためには、既存の枠組みや考え方に囚われない、柔軟な発想での実験的取組が可能となる制度設計や環境構築の検討が必要となります。

ここまであげたコンセプトと実現方策のイメージ図を次に示します。

ハード面の技術革新が著しい分野やソフト面の取組は、状況変化に応じて適宜対応すべきものであるため、必要に応じて取組に加え、継続的な取組を通じた地域活性化を目指します。

将来イメージ

